●モノグラフ 小学生ナウ

手伝い

vol.4-5

©1984(株)福武書店 教育研究所/加藤智穂・和田京子
放送大学教授 深谷昌志
東大阪市立孔舎衙東小学校教諭 東 訓正
奈良県桜井市立安倍小学校教諭 山田敏子

目次

特集／男性にとっての家事手伝い …… 2

調査レポート／手伝い …… 6

要約と提言 …… 6

1.手伝いの実際と親からの期待 …… 8
- よくしている手伝いとしていないもの …… 8
- 母親たちの期待 …… 10

2.手伝いのイメージ …… 15
- 手伝いは子どものすべきことか …… 15
- 家事への自信 …… 17
- 手伝いをする子のイメージ …… 19

3.手伝いと性差 …… 21
- 家事を主に担当している人 …… 21
- 子どもたちのつくる家庭 …… 23
- 女の子の手伝い観 …… 25

シリーズ／講座・子ども調査入門⑤
調査票づくり …… 28

資料1 調査票見本 …… 33
資料2 学年・性別集計表 …… 40

特集

男性にとっての家事手伝い

放送大学教授　深谷昌志

岡本太郎のポトフ

このところ、厨房へ入る男性が増加している。荻昌弘、金子信雄などの諸氏の影響であろうが、ほうちょうをもつ男性の姿にめめしさが感じられなくなった。むしろ開き直りにも似た言い方で、男の料理の良さが見直される昨今である。

あらたまって、かく言う筆者もと、名のりあげるほどの腕前ではないが、少なくとも、回数の面では、筆者も、厨房へ入ろう会のメンバーになる資格を備えていると自負している。

研究者の共働き夫婦であるから、夫と妻との間で、在宅している日と夜の遅い日がそれぞれことなっている。となると、在宅しているほうか、あるいは帰宅時間の早いほうが食事の支度をするのが自然のスタイルとなる。

それでも、昨年までは、関西の大学へ勤め、毎週1回、新幹線で往復する生活を送っていたので、ほうちょうをもつ回数がおのずと限られていた。しかし、放送大学へ転勤したのは良いが、今度は幸か不幸か大学まで乗用車で10分の距離にあり、その上、道順に大手のスーパーが何軒かある。となると、必然的に

料理をする回数がめっきり増加してきている。

教授会が終わると、スーパーへ寄って夕食の材料を仕入れる。そうした折り、顔見知りの主婦などに会うと、「奥さんの先生は、ご病気ですか」とたずねられることが少なくない。男性が、バスケットを片手に、スーパーの中を歩き、ねぎや魚を買っているのが、いかにも異様な姿に見えるらしい。

もっとも、筆者が女性ならごくあたりまえのことなのであろうが、男性で、けっして若くなく、しかも固苦しいと思われている職についている者が、大根や肉を手にしているので、異和感を与えるのであろう。

そうはいうものの、台所へ入りはじめたのは、それほど昔のことではない。東京の下町の商人の家に生まれたから、従業員が多い。それに姉が2人いるという環境のもとで育ったので、結婚するまで、リンゴの皮をむいた経験がなかった。

しかも、結婚した相手が自分と同じような大学院生だったので、すべて気ままな暮らしで、空腹になったら外へ行って何かを食べるという生活だった。しかし、子どもが生まれると、そうもいかなくなる。乳幼児の食べられるものを置いてある店はけっして多くはないし、それに栄養面での偏りも気がかりになる。

そうしたわけで、いちばん最初に手がけた料理は、もちろん料理などといえる代物ではないが、ともかく、ポトフだった。

岡本太郎さんのエッセイを読んでいたら、パリの苦学生のころ、大きな鍋に、肉のかたまりににんじんや玉ねぎ、じゃがいもをまるのまま入れて、何時間も煮込む。もちろん、にんにくやスープの素を入れ、あくをていねいにとる。そうすれば、ピストル風のポトフができる。味が単調になったら、トマトピューレや牛乳、ウスターソースを入れて変化をつける。

筆力が秀れているので、今すぐにでもポトフができそうな感じがして、さっそく大きな鍋を求めることにした。そして、それなりのポトフができた。

男性失格の感じ

料理などというものは食べるもので、作ることなどないと思っていただけに、ポトフを曲りなりにも食べることができたのが感激的であった。

なにごとにつけ理屈っぽく、そして文献を集めるのが研究者の習性なので、料理についても、ろくろく何もできないのに、とにかく資料を読み始めた。ほうちょうが使えないので、どうしても簡単な料理になる。それでも、コーンポタージュやコンソメなどのスープをはじめ、ハンバーグやステーキなども、それほど作り方がむずかしくないのがわかった。

習うより慣れろという言い方があるが、いつしかほうちょうも使えるようになり、最近では、暇があると、前日からスープストックを仕込んだり、あるいは、旅先からその土地

の名産を買ってきて料理したりする機会も増加している。

研究者の場合、自宅に籠りきって資料を読んだり、原稿を書いたりする生活が続くことがある。そうした時に料理は、手ごろな気晴らしの対象となる。みじん切りにした玉ねぎを、30分、そして40分と炒めていると、原稿を書いている疲れを忘れる。オックステールを煮込んでアクをこまめにとるのも、なんとも楽しい。何時間もかけた料理があっという間にみんなの胃の中に入り、あとには何も残らない。むなしいような気もするが、同じ味のものを二度と作れないあたりが、料理のもつ良さなのかもしれない。

そうした意味では、厨房へ入るのが、いつしか趣味になりつつある。というと聞こえがよいが、今にして思えば、ポトフが運命の別れ道だったような気がする。

ワイフは大学へ行って不在だし、赤ん坊も栄養失調にできない。そうした状況の前には、男性も女性もない。うれしそうにじゃがいもを食べる子どもを見ていると、また作ろうという気持ちも強まる。

そうしたわけで深みにはまりこんでしまったわけだが、そうはいっても、料理は女性のものという感覚が身についているので、はじめのうち、じゃがいもやにんじんをもっている自分が男性失格のように思えてならなかった。

そういう感覚を残していると、たまたまおいしい料理ができると、それがなんとも腹立たしくなる。男性度がますます減ってくるように思えるからである。

欧米の性差撤廃の動き

こうした個人的な感想を書き綴ったのは他でもない。手伝いをしない子が増加しているが、それでも女の子たちは手伝っているし、手伝っていない場合でも、ある種のやましさ

を味わっている。しかし、男の子たちは、手伝いをしない自分を当然だと思っている可能性が強い。

たしかに、現在の家庭では、母親が家事を担当していることが多い。それも、専業主婦が家事を担うのは当然であろうが、共働きの場合でも、母親が炊事や洗たくをしている。そういえば、数年前に女性教師を対象とした調査を実施したことがあった。教師の場合、結婚相手の大半は同僚の教師であるから、勤務条件は、夫婦ともほとんど同じである。それにもかかわらず、3分の2以上の家庭で、女性教師が家事を主として担っていた。しかも、若いうちはともかく、出産や育児などが加わって家事が大変になる世代の夫婦でも、母親教師が家事を背負っている。

妻が家事をしている間、夫は何をしているのかという疑問がわくが、家事は女性の仕事という前提を守っていれば、ことさら問題は生じないのかもしれない。

このところ欧米では、性差別が大きな社会問題になりつつある。 postman や chairman のように、性差をあらわにする単語は man を person に置きかえて使っているし、Miss や Mrs も、相手によっては使いにくくなった。それと同時に、求人にあたって容姿端麗はむろんのこと、若い女性というような条件をつけることも法律違反となる。

そうした動きの中で、テレビのキャスターや大学のスタッフなどにつく女性が急速に増加しているし、軍隊をはじめ、伝統的に男性の仕事といわれるジャンルへ進出している女性も目につく。それと同時に、夫は社会へ出て働き、妻は家を守るという性差に対応した役割分業論に批判が集まっている。特に、学校の教科書などで性差を強調することは禁止されているので、改訂を行った教科書も多い。

正直なところ、かつてのレディファーストは、女性を弱きものとして庇護したといえばきこえがよいが、女性を男性と対等に扱った

ものではなかった。そうした扱いは過保護にすぎると思うが、そうかといって、このところの性差別の撤廃は、性差そのものすらも否定しているようで、なんとなく無理をしている感じがする。

日本の場合、どうしたことか、欧米流の性差にかかわる論議が、日常生活のレベルに浸透していない。しかし、いずれ、遅かれ早かれそうした意識変革の動きが顕在化してこよう。特に日本でも、働く母親の姿が増加しているので、当然のことながら、母親が就労すれば、働いているのは父親だけでなくなる。それを裏返しにすると、家事をするのは母親だけの仕事と言いがたくなる。そうした形で、男子が厨房へ入るのが、むしろあたりまえになる日も近いのかもしれない。というより、そうした形にならないと、夫と妻との間が冷たい関係となり、離婚率が高まる可能性が強い。しかし、現状を見る限り、そうした指摘は杞憂のようで、家庭の中での性的な役割分業の形は、容易には崩れない感じがする。

調査レポート／手伝い

放送大学教授　深谷昌志
東大阪市立孔舎衙東小学校教諭　東　訓正
奈良県桜井市立安倍小学校教諭　山田敏子

要約

① よくしている手伝い

子どもたちは、ほとんど手伝いをしていない。そうした中で、わずかにしている手伝いの3位までは、①食器を流しへ運ぶ、②ごはんの時、茶わんを並べる、③ごはんをよそうとなる(図1)。

② 親からの期待と実際

子どもたちは、親から家事を手伝うように言われているのはわかっている。しかし、わかっているけれど、手伝わないのにすぎない(図3)。

③ 手伝うのは子どもの仕事か

子どもたちは、ほとんどすべての手伝いを、ほんとうは、子どもとしてしたほうがよいと思っている。たとえば、ふろに水を入れるに82%、洗たくものをたたむに74%が、子どもの仕事だと答えている(図6)。

④ うまく手伝うようになるのに必要な期間

子どもたちは、ほとんどすべての家事は、2～3日もあればすぐにうまくできるようになると思っている(図7)。

⑤ 手伝いをする子のイメージ

子どもたちによると、手伝いをする子は、思いやりがあり、やる気に富むなど、すべての面で良い子だと思っている(図10、11)。

⑥ 手伝いと性差

子どもたちは、自分たちの作る家庭でも、現在の家庭がそうであるように、母親が中心となって家事を担っていくだろうという(図14)。

提言

子どもたちは、家事の大事さを十分にわかっている。そして、手伝うのが子どもの仕事だとも思っている。しかし、実際にしているのは、自分の食器を流しへ運ぶ程度にすぎない。わかっているけれど、やろうとしない。そこらに、手伝いの問題がある。それだけに、親としては、もっと手伝わせる必要があろう。

サンプル数　(人)

学年／性	男　子	女　子	計
4　年	302	298	600
5　年	243	252	495
6　年	292	277	569
計	837	827	1,664

調査概要

対象●大阪・奈良近郊の小学4・5・6年生
時期●昭和59年2月～3月
方法●学校通しによる質問紙調査

1．手伝いの実際と親からの期待

よくしている手伝いとしていないもの

休み時間、教室の片隅にあるゴミ箱に眼をやり、「捨ててきてちょうだい」とたのむと、いかにもイヤそうに運んでいく子どもがいる。窓の開閉にしても、ぞうきんのあとかたづけにしても、イヤイヤながらやらされているといった表情で動く子どもたちが多い。

自分たちの教室のことをするのに、どうしてそんなにイヤがるのか。学校ですらこの状態なのに、家に帰って、いったいどうしているのだろうと考えさせられる昨今である。

勉強することだけが自分の本分だと考え、しなくてもすむ仕事は、「だれかがするだろう」と思うのか、いわゆる手伝いを自分から進んでする子どもたちは少なくなってきている。

家では、母親が家事のほとんどを一手にひきうけている。その親に全面的に依存してしまって、子ども自身は家族の一員としての家事分担に加わっていない可能性が強い。

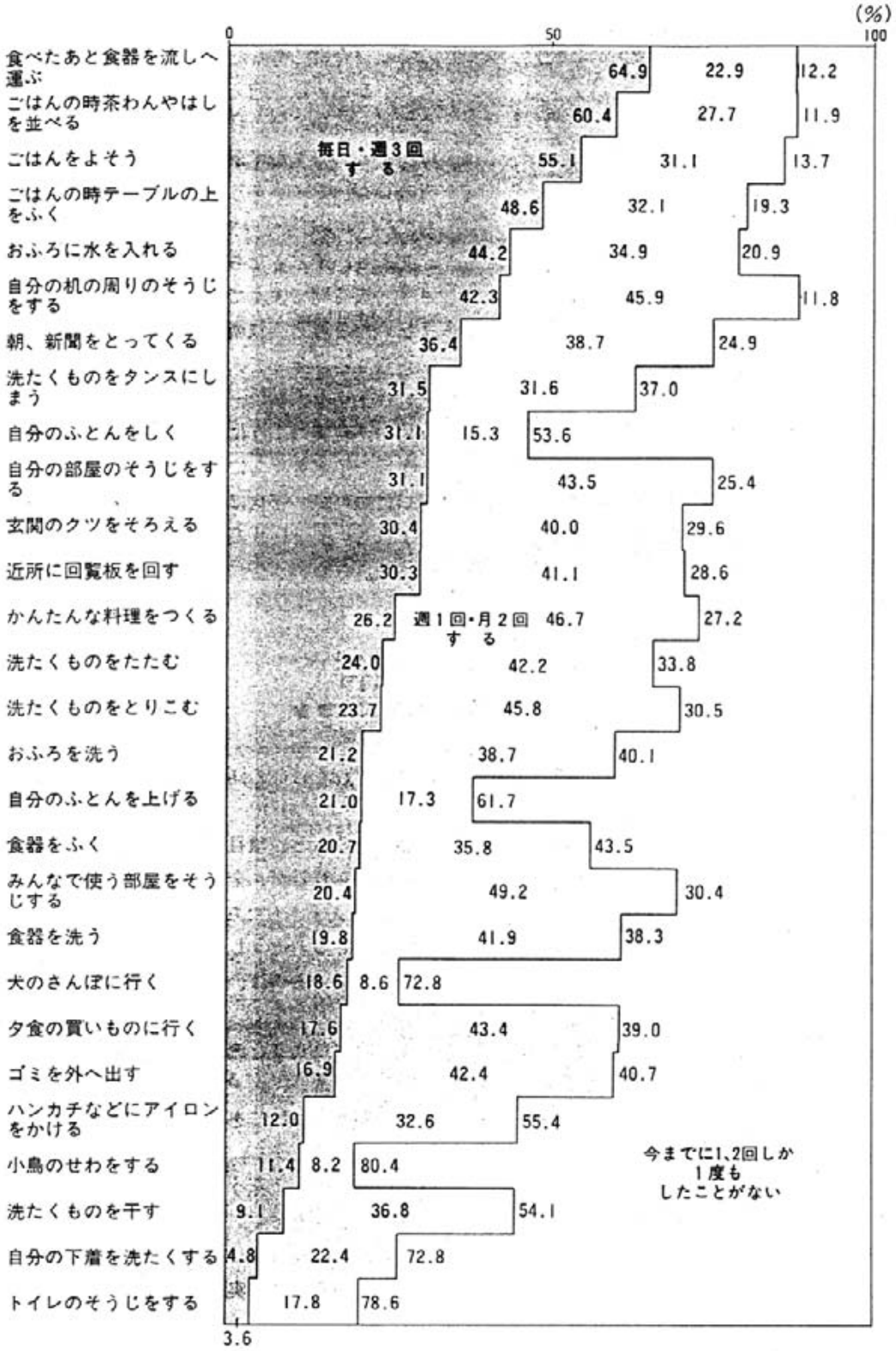
ともあれ、子どもたちの家でのお手伝いの実態を調べてみると、図1が示すようになる。そして、身近なお手伝いについて、子どもたちが「週3回はやっている」を含めて、毎日のようにもっともしているのは、「食器を流しへ運ぶ」の65％で、以下、図のとおり「トイレのそうじ」の4％まで広がっている。

この中から、子どもたちが比較的よくやっているものとほとんどやっていないお手伝い、いわゆる、お手伝いベスト5とワースト5をあげることにしよう。

〈ベスト5〉

1．食べたあと、食器を流しへ運ぶ

図1・お手伝いの実態


(%)
0
50
100
毎日・週3回する
週1回・月2回する
今までに1、2回しか1度もしたことがない
食べたあと食器を流しへ運ぶ 64.9 22.9 12.2
ごはんの時茶わんやはしを並べる 60.4 27.7 11.9
ごはんをよそう 55.1 31.1 13.7
ごはんの時テーブルの上をふく 48.6 32.1 19.3
おふろに水を入れる 44.2 34.9 20.9
自分の机の周りのそうじをする 42.3 45.9 11.8
朝、新聞をとってくる 36.4 38.7 24.9
洗たくものをタンスにしまう 31.5 31.6 37.0
自分のふとんをしく 31.1 15.3 53.6
自分の部屋のそうじをする 31.1 43.5 25.4
玄関のクツをそろえる 30.4 40.0 29.6
近所に回覧板を回す 30.3 41.1 28.6
かんたんな料理をつくる 26.2 46.7 27.2
洗たくものをたたむ 24.0 42.2 33.8
洗たくものをとりこむ 23.7 45.8 30.5
おふろを洗う 21.2 38.7 40.1
自分のふとんを上げる 21.0 17.3 61.7
食器をふく 20.7 35.8 43.5
みんなで使う部屋をそうじする 20.4 49.2 30.4
食器を洗う 19.8 41.9 38.3
犬のさんぽに行く 18.6 8.6 72.8
夕食の買いものに行く 17.6 43.4 39.0
ゴミを外へ出す 16.9 42.4 40.7
ハンカチなどにアイロンをかける 12.0 32.6 55.4
小鳥のせわをする 11.4 8.2 80.4
洗たくものを干す 9.1 36.8 54.1
自分の下着を洗たくする 4.8 22.4 72.8
トイレのそうじをする 3.6 17.8 78.6

2．ごはんの時、茶わんやはしを並べる
3．ごはんをよそう
4．ごはんの時、テーブルの上をふく
5．おふろに水を入れる

〈ワースト5〉

1．トイレのそうじ
2．自分の下着の洗たく
3．洗たくものを干す
4．ハンカチなどにアイロンをかける
5．ゴミを外へ出す

ここに掲げたベスト5のうち、1から4までは、自分が食事をする時に必要な用意であり、イスに腰かけて、食事のついでにできる作業である。また、5番目は、水道の蛇口を開いておけばすむことであろう。

そう考えると、このベスト5から、お手伝いをしているかのような印象を受けるが、果たして、これらをお手伝いと呼べるのか疑問が残る。

次にワースト5をみると、トイレそうじや洗たくなど、家事の一部を担う本格的なお手伝いが大半を占める。しかし、こうした仕事になると、今までやったことがないという子どもたちが過半数を超える。もっとも、4番目のアイロンかけは、技術を要するとともに危険も伴うので、むずかしい手伝いなのかもしれないが、トイレそうじなどは家族の1人として、もう少ししていてもよい手伝いであろう。

しかし、子どもたちは、たいした技術も要さず、短時間ですぐできることをするのをお手伝いだと考え、技術を要することや時間のかかること、そして人のためになることは、それが大切な家事の一部であっても、していないのが現実のようにみえる。それでは、このような子どもたちに対し、母親たちはお手伝いについて、どれほど「してほしい、手伝ってほしい」という期待を抱いているのであろうか。

母親たちの期待

図2は、母親たちが子どもたちに「手伝ってほしい」と望んでいる割合を示している。母親たちとしては、食事のあと、食器を流しへ運ぶ(85%)や、茶わんを並べる（82%）などは、日常的にやってほしいと考えている。また、自分の机の周りのそうじや、自分の部屋のそうじもともに79%、75%と子どもたち自らするのを望んでいるようにみえる。

それに対し、トイレそうじや料理、アイロンかけ、下着の洗たくなどについては、それらを望む割合は、3割強にとどまっている。

母親たちにしてみれば、トイレそうじやアイロンかけのように、子どものいやがることや危険を伴う家事まではさせるつもりはない。しかし、せめて、自分の食べた食器や食事の準備ぐらいは手伝うべきだというのであろう。

それでは、親たちが子どもたちに抱いている期待と、子どもたちのお手伝いの実態との間に、どれくらいの開きが存在するのであろうか。

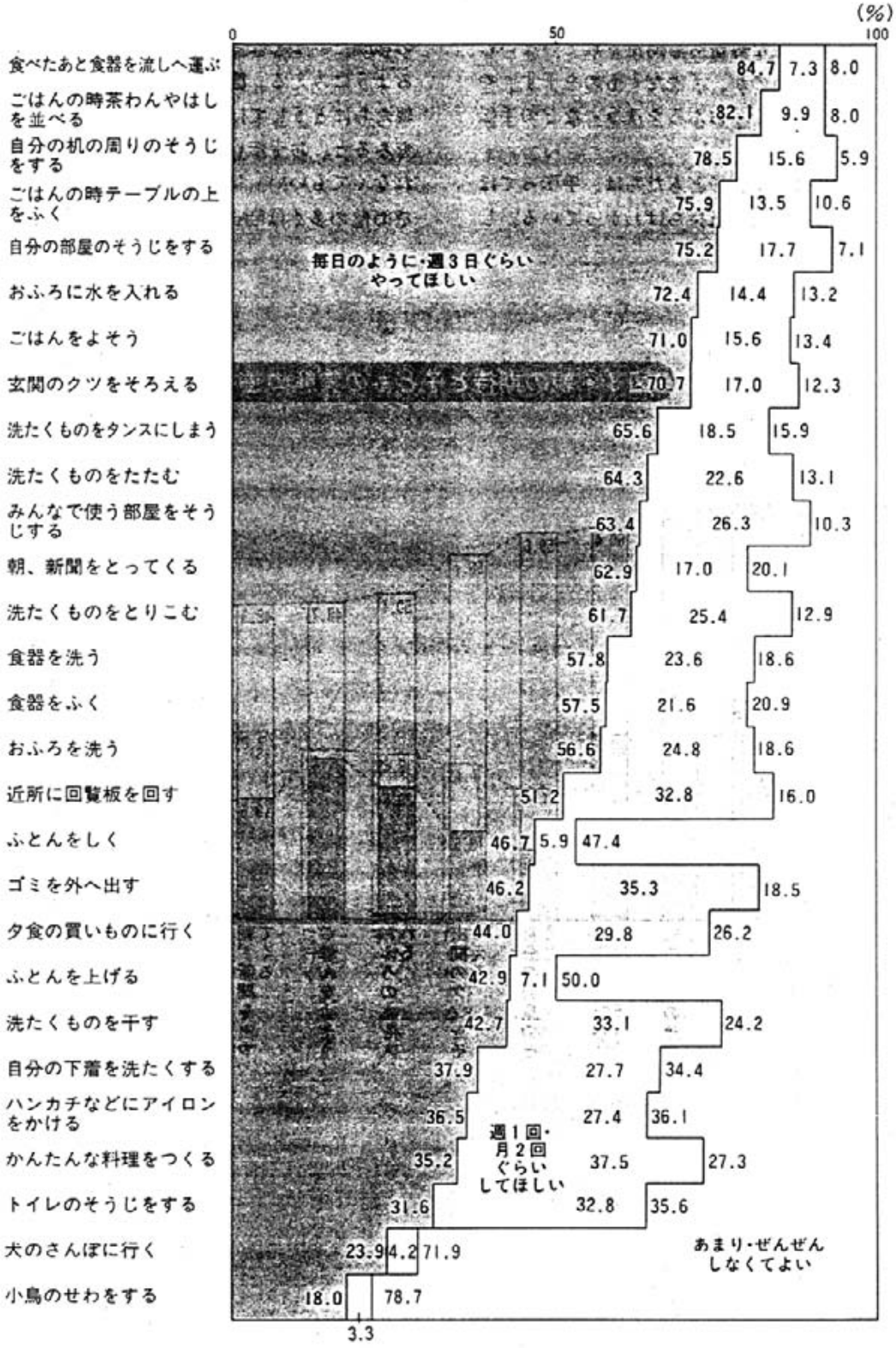
図3をみると、項目により、多少のちがいが見受けられるが、全体として、母親の期待とくらべ、子どもたちのお手伝い率は5割を下回っている。そうした中で、実行率が5割を上回っているのは、

		期待	実際	実行率
1	食べた食器を流しへ運ぶ	72%	46%	64%
2	茶わんやはしを並べる	64%	34%	53%
3	ごはんをよそう	49%	25%	51%
4	ふとんをしく	39%	23%	59%

に限られており、それに対し、することを期待されているのに、実行率が低いのは、

1	机の周りのそうじ	63%	19%	30%
2	自分の部屋のそうじ	60%	11%	18%

図2・お母さんの期待


(%)
0
50
100
食べたあと食器を流しへ運ぶ
ごはんの時茶わんやはしを並べる
自分の机の周りのそうじをする
ごはんの時テーブルの上をふく
自分の部屋のそうじをする
おふろに水を入れる
ごはんをよそう
玄関のクツをそろえる
洗たくものをタンスにしまう
洗たくものをたたむ
みんなで使う部屋をそうじする
朝、新聞をとってくる
洗たくものをとりこむ
食器を洗う
食器をふく
おふろを洗う
近所に回覧板を回す
ふとんをしく
ゴミを外へ出す
夕食の買いものに行く
ふとんを上げる
洗たくものを干す
自分の下着を洗たくする
ハンカチなどにアイロンをかける
かんたんな料理をつくる
トイレのそうじをする
犬のさんぽに行く
小鳥のせわをする
毎日のように・週3日ぐらいやってほしい
週1回・月2回ぐらいしてほしい
あまり・ぜんぜんしなくてよい
84.7 7.3 8.0
82.1 9.9 8.0
78.5 15.6 5.9
75.9 13.5 10.6
75.2 17.7 7.1
72.4 14.4 13.2
71.0 15.6 13.4
70.7 17.0 12.3
65.6 18.5 15.9
64.3 22.6 13.1
63.4 26.3 10.3
62.9 17.0 20.1
61.7 25.4 12.9
57.8 23.6 18.6
57.5 21.6 20.9
56.6 24.8 18.6
51.2 32.8 16.0
46.7 5.9 47.4
46.2 35.3 18.5
44.0 29.8 26.2
42.9 7.1 50.0
42.7 33.1 24.2
37.9 27.7 34.4
36.5 27.4 36.1
35.2 37.5 27.3
31.6 32.8 35.6
23.9 4.2 71.9
18.0 78.7
3.3

3 玄関のクツを　　56%　14%　25%
　そろえる

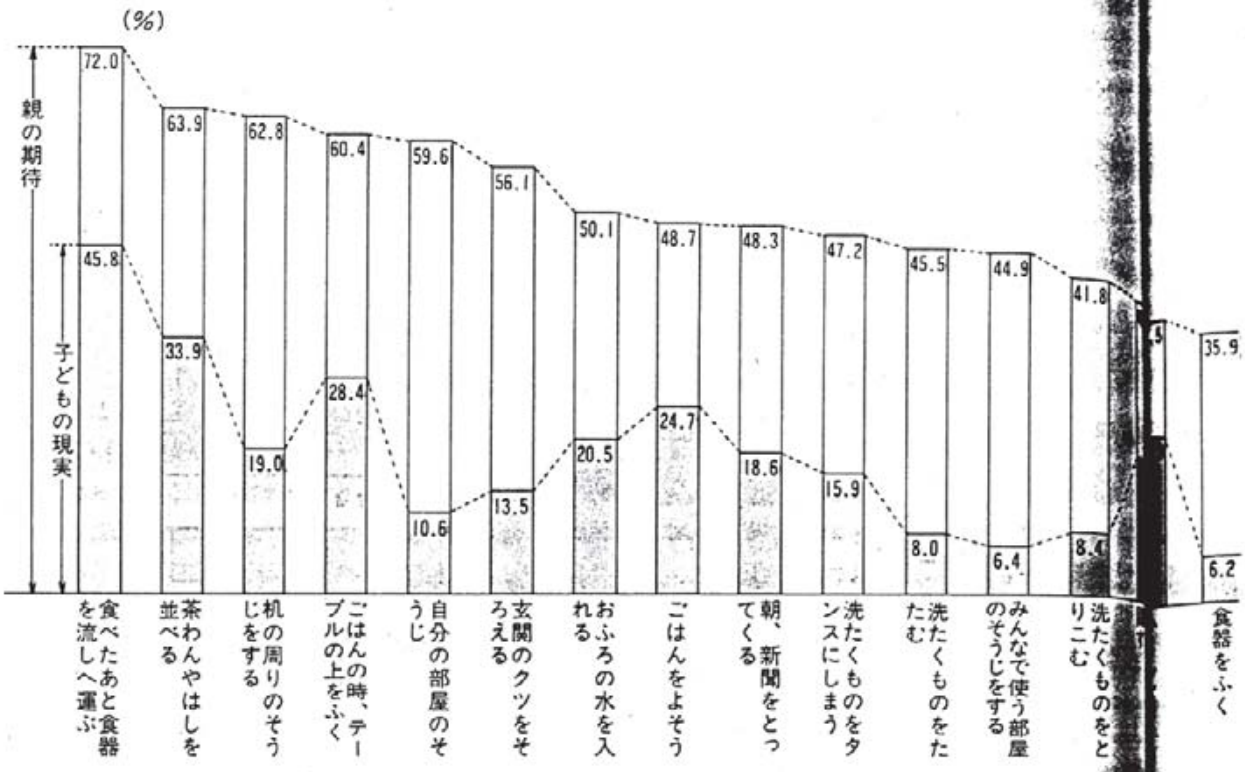
などとなる。

そして、親たちからも期待されていないし、実行率も低いのが、「洗たくものを干す」や「食器をふく」、「おふろを洗う」などの手伝いとなる。

いずれにせよ、子どもたちは、手伝ってほしいという母親の気持ちはわかっている。しかし、その半分ほどしか実行していないのである。

そうした子どもたちも、お手伝いをした時の報酬だけは、はっきりと親たちに望んでいるようにみえる。図4に、お手伝いをした時、親たちにどうしてほしいかを示したが、これをみると、お手伝いをした時、「何もしてくれなくてもいい」は41%にとどまっており、その他の多くは「ありがとうと言ってほしい」

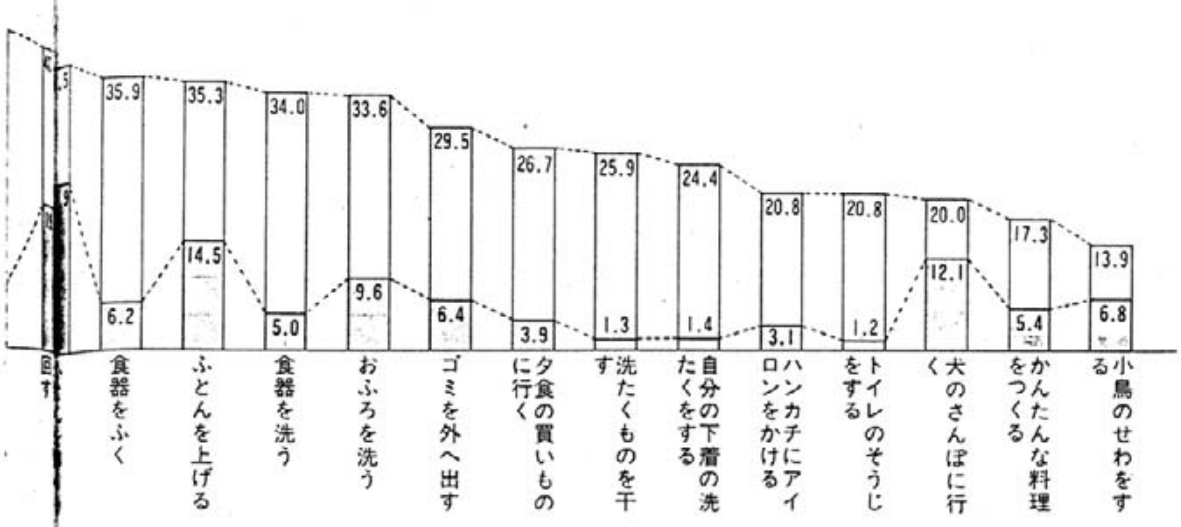
図3・親の期待と子どもの実態の差



（87%）や、「ほめてほしい」（79%）という期待を抱いている。それと同時に、「おこづかいがほしい」（67%）や「何か買ってほしい」（56%）という物質的報酬を望む子どもも、けっして少なくない。

それに対して親たちは、子どもたちがお手伝いをしたことを、どのように思っているのであろうか。

図5に、親たちの気持ちを子どもなりにおしはかった結果を示した。これをみると、子どもたちがお手伝いをしていることに、親たちが「ありがとうと感謝している」（70%）とともに「子どもの将来に役立つ」（63%）と思っているのがわかる。そして、親がラクをしていると感じている子どもは3割にとどまっている。



数字は「毎日」に対する割合

図4・おうちの人にしてほしいこと

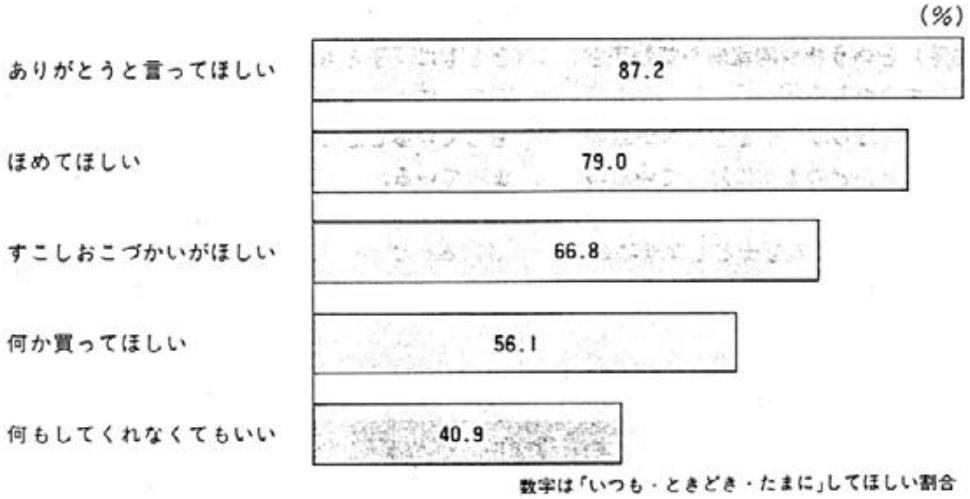
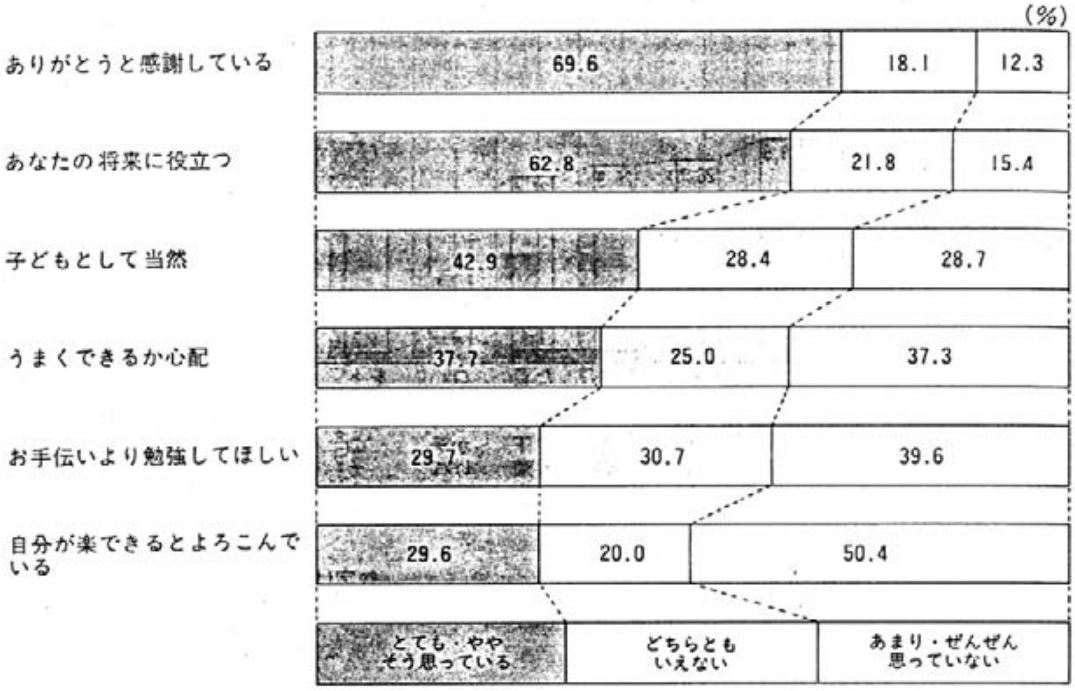
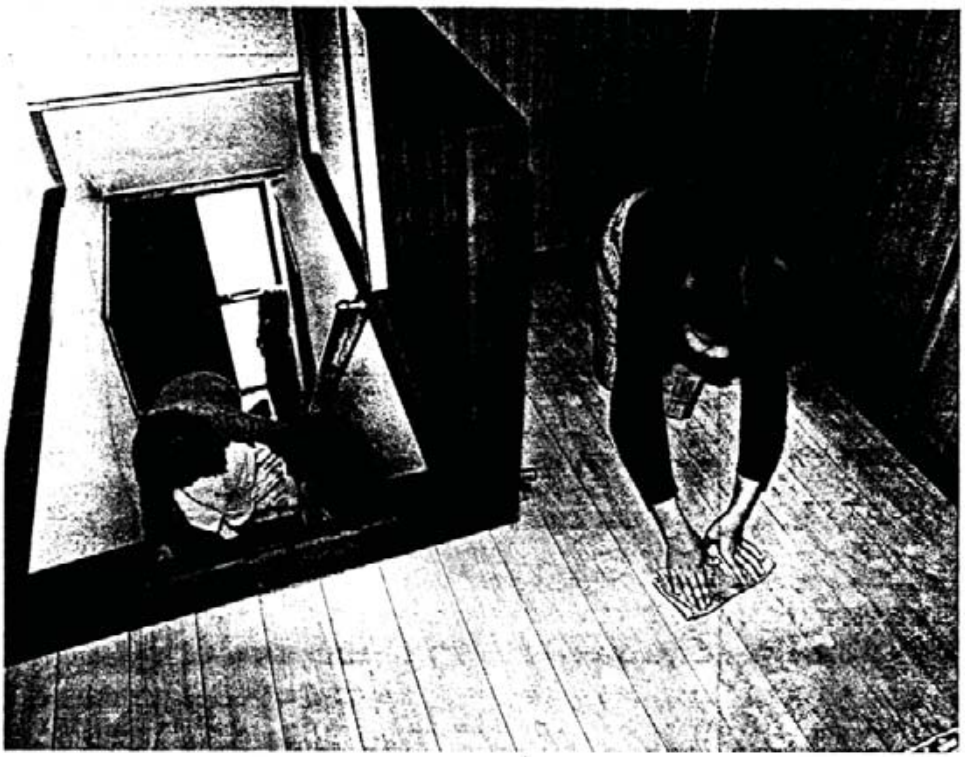


図5・お母さんの「お手伝い」についての思い(子どもの予想)



2. 手伝いのイメージ



手伝いは子どものすべきことか

手伝いをしていることに、子ども自身、そして、親がどう思うのかは、手伝いの性格にからんでくる。というのは、かりに手伝うのが当然だとするなら、子どもとして手伝うのをあたりまえと思い、親としても、子どもの手伝いにことさら感謝することはあるまい。しかし、家事をするのが親の守備範囲なら、子どもが手伝った場合、それは、してあげるであり、親からすると、してもらうになる。

そうした意味では、家事を手伝うのが子どもとして当然しなければいけないことなのかどうかが問題になる。

図6は、「あなたの家で、今はお母さんやほかの人がしているけれど、ほんとうはあなたがしたほうがいいと思うことがありますか」の形で、子どもが手伝うことへの気持ちをたずねた結果を示している。そして、回答を、

自分が｛ぜひしたほうがよい／まあしたほうがよい｝

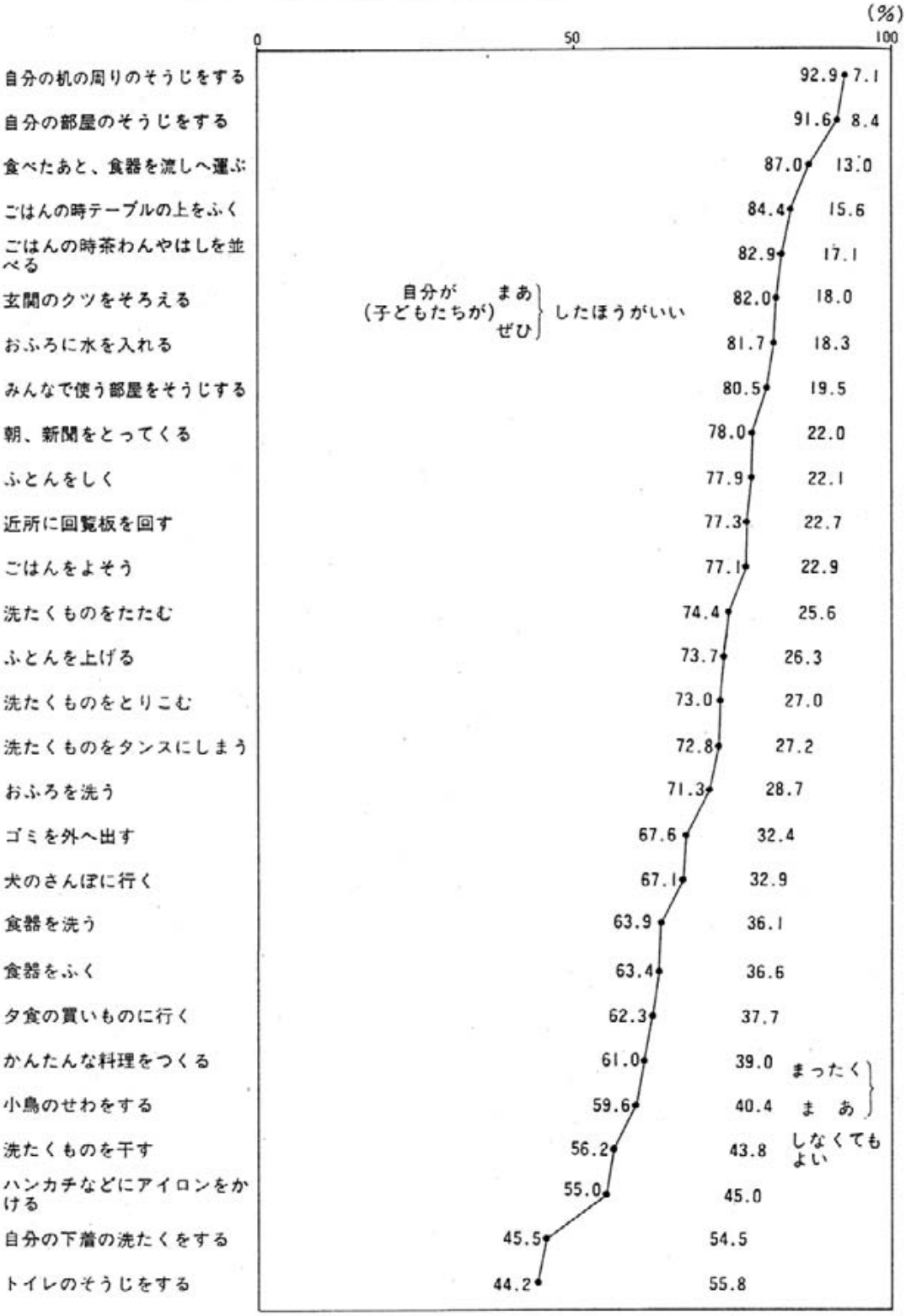
自分が｛あまりしなくてもよい／しなくてもよい｝

と分類してとらえてみると、図の示す通り、

28項目の中
- ①自分がしたほうがよい　7割以上……17項目
- ②自分がしたほうがよい　5～7割……9項目
- ③自分はしなくてもよい　5割……2項目

と、「自分の下着の洗たく」と「トイレのそうじ」を除く26項目について、子どもたちが、手伝いをしなければならないと思っているのがわかる。

図6・ほんとうは子どもがしたほうがいいか



しかも、項目の中では中位に位置していいくつかの項目について、もう少しこまかく反応をたどると、以下のとおりとなる。

・食器を洗う

しなくてもよい {まったく 11%、あまり 25%} >36%

したほうがよい {まあ 39%、ぜひ 25%} >64%

・洗たくものをとりこむ

しなくてもよい {まったく 8%、あまり 19%} >27%

したほうがよい {まあ 41%、ぜひ 32%} >73%

つまり、自分はしなくてもよい、換言するなら家事は親がするものと考えている子どもたちにしても、「まったくしなくてよい」と思っているのは1割前後に限られている。そうした意味では子どもたちは、実際に手伝っているかどうかはともあれ、手伝うことが必要だと思っているのはたしからしい。わかっているけれど、しないだけにすぎない。

家事への自信

もっとも、子どもたちは、「次のようなことをするのに、どれくらい練習すればうまく（今お母さんができるくらいに）できるようになると思いますか」について、図7のように答えている。図中の15項目のうち、「夕食をつくる」を除くと、「洗たくものを干す」や「リンゴの皮むき」などについて、すぐにでもできるし、せいぜい3日もあれば十分という反応が6割を超えている。

	アイロンかけ		みそ汁づくり	
今すぐにできる	44%	76%	32%	72%
1日でできるようになる	18%		21%	
3日くらいでできるようになる	14%		19%	
1週間ぐらいでできる	10%	14%	13%	18%
半月ぐらいでできる	4%		5%	
1カ月ぐらいでできる	3%	10%	3%	10%
2～3カ月ぐらいでできる	3%		3%	
うまくなりそうにない	4%		4%	

上記がその一例だが、子どもたちは、今までやっていなくとも、というより、やっていないからなおのことなのかもしれないが、家事はやる気になればすぐにできるようになると思っている。たしかに、親たちのしているのを見れば、家事はやさしいように思えよう。手伝いをしていない子どもだけに、あんなことは簡単と思うのは当然なのかもしれない。

もっとも、子どもたちは、図8のとおりに、自分たちがおとなになるころ、夕食の買いものやトイレのそうじなどはともあれ、洗たくや食器洗いといった道具を利用する分野では、もっと機械化が進むだろうと予測している。したがって、家事を手伝うまでもないのかもしれない。

さらに、子どもたちは、図9のように、自分としては、身の回りのことはだいたいできると思っている。したがって、少なくとも、手伝いを身近な生活習慣の形成と考えるなら、子どもたちは、それなりにしていると言えるのかもしれない。

図7・うまくなるまでの練習期間

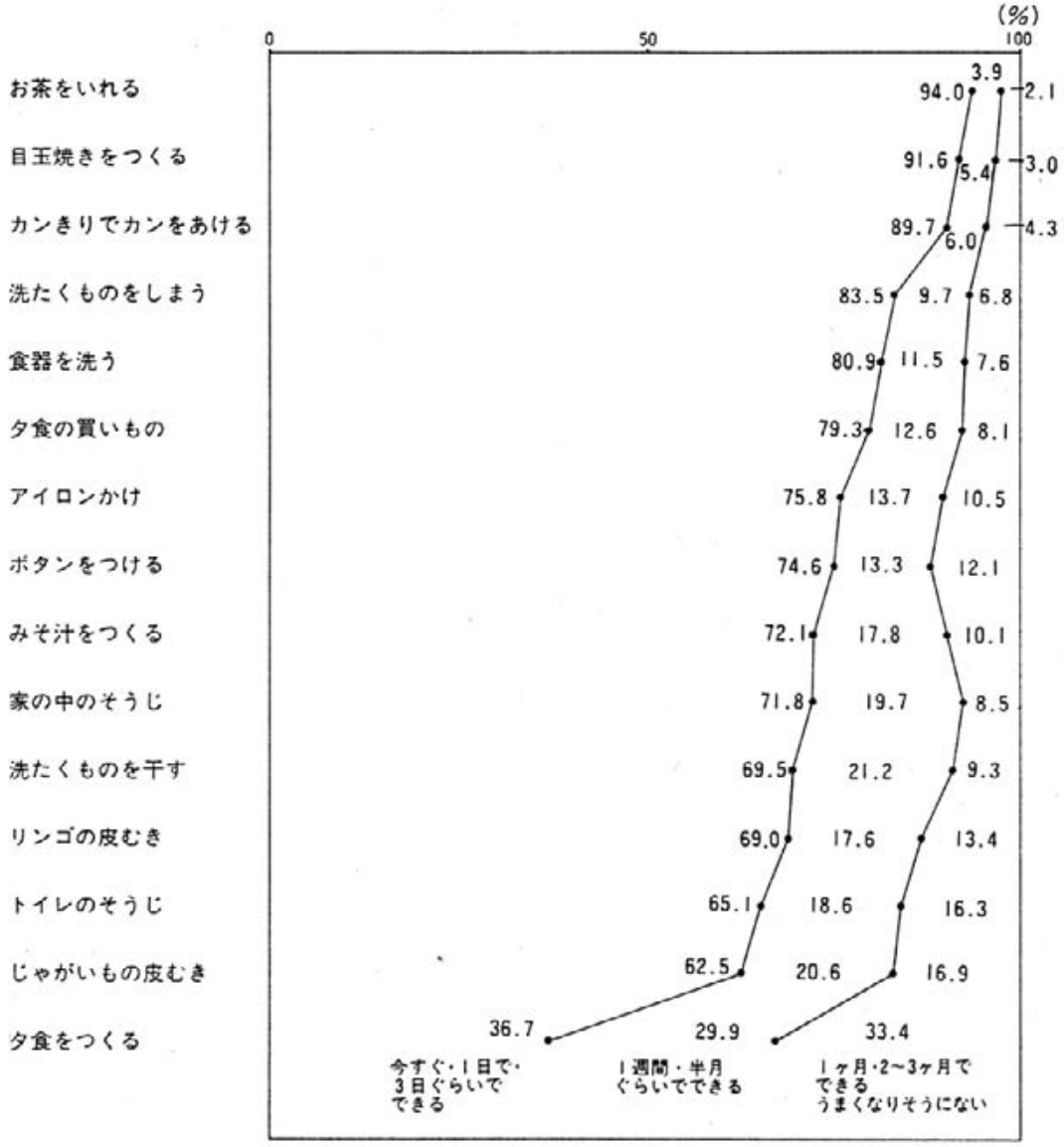


図8・おとなになるころ、機械がしてくれるか

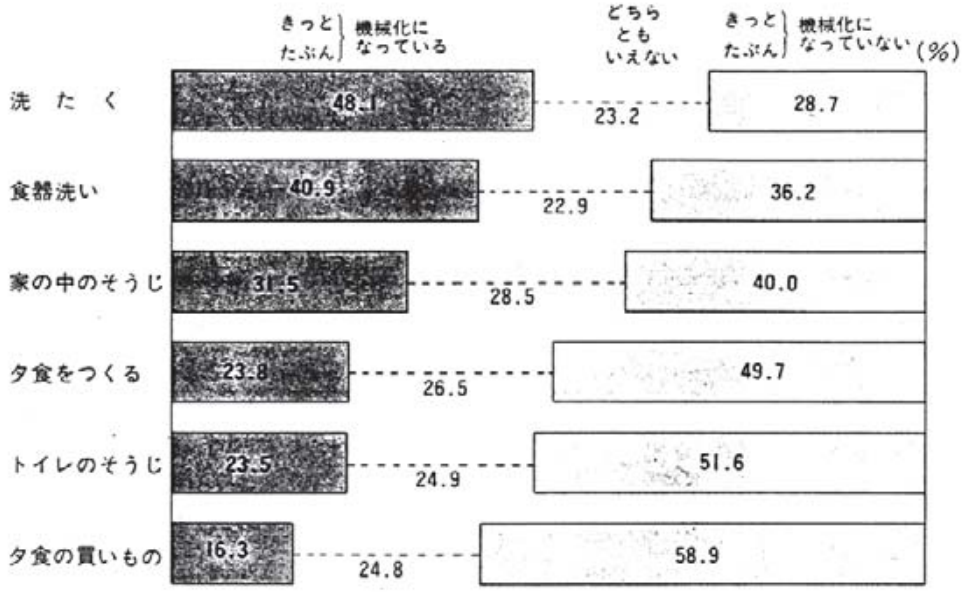
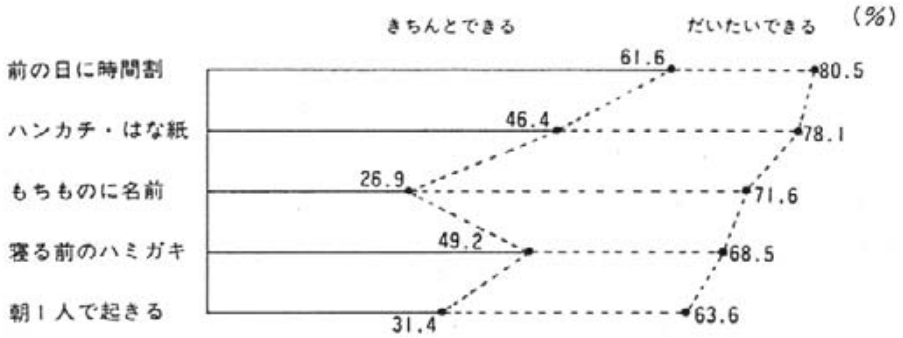


図9・自分のできること



手伝いをする子のイメージ

なお、子どもたちに、手伝いを「とてもよくする子」と「ぜんぜんしない子」を連想させ、その子がどんな子なのかをたずねると、図10～11となる。「とても」「やや」思うに注目して、この2つのグラフを要約すると、

	手伝いをしている子		手伝いをしない子
母親思い	81%	>	7%
やる気がある	78%	>	8%
思いやりがある	75%	>	8%

係の仕事をする	68%	＞	9%
がまん強い	56%	＞	12%
友だちが多い	54%	＞	28%
勉強が得意	39%	＞	16%

となる。不等号の向きが示すように、予想外にと言うべきか、子どもたちは、手伝いをしない子はやる気に乏しく、親に冷たく、思いやりに欠ける子だとみなしている。それに反し、手伝いをしている子は、親思いで思いやりがあるのはむろんだが、友だちも多く、勉強の得意な子だという。

このようにみてくると、子どもたちは、図6でもふれたように、手伝いをするのは子どもとして当然のことだし、そして図10のように、手伝いをする子はよい子だという。つまり、子どもたちは観念として、手伝いの大事なことはわかっている。しかし、冒頭でふれた通り、手伝いをしていない。ということは、わかっているけれどしていないのであり、そこらに、手伝いのもつむずかしさが潜んでいるのであろう。

図10・お手伝いをよくする子

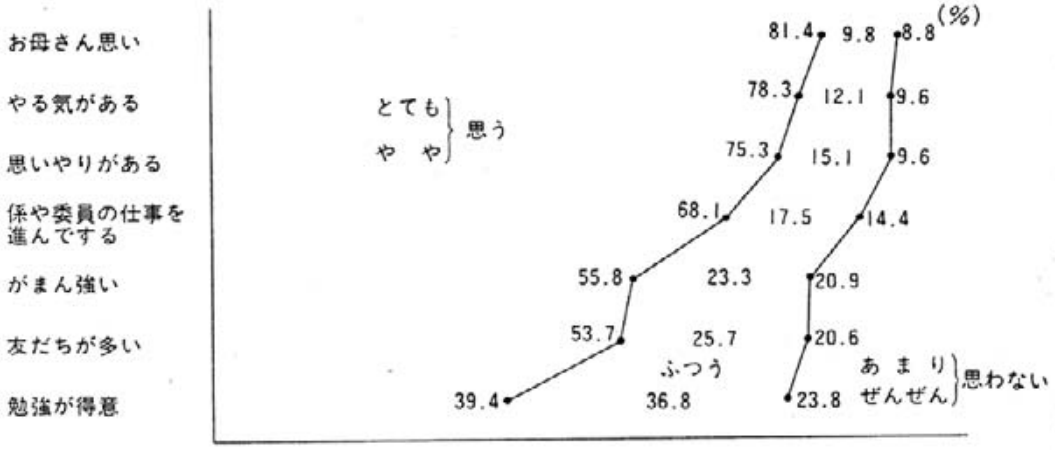
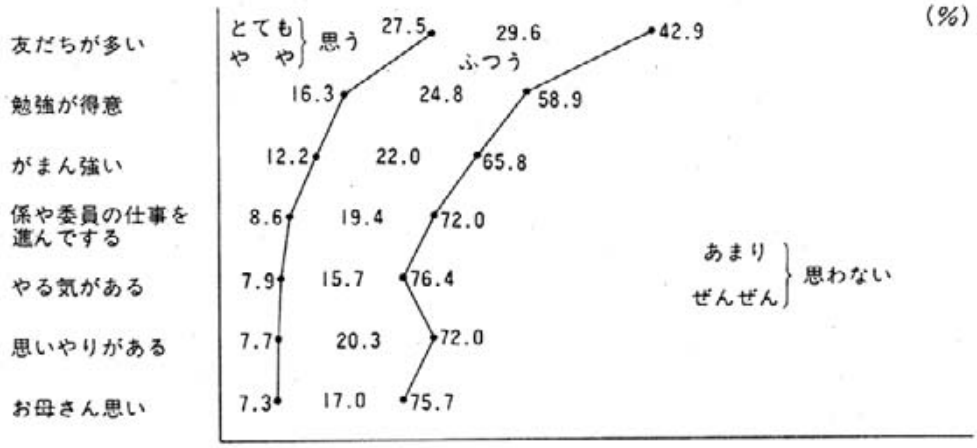


図11・お手伝いをしない子



3. 手伝いと性差

家事を主に担当している人

今まで、子どもサイドから家事のあり方を考えてきた。そこであらためて、家事を主にだれが担当しているのかをたずねると、当然のことながら、図12のとおり、家事の「ぜんぶ」「ほとんど」を母親が担当している。

そして、そうした図12の裏返しとして、図13のような結果がある。つまり、父親が手伝いをしている家庭はきわめて少なく、父親としては「とても」「わりと」している部屋のそうじでも、している割合は21%にすぎない。

数年前、「ボク食べる人」のCMが、問題となったことがあった。家事は女性が担うというような見方を助長するというのである。そして最近では、料理などに精を出す男性も増加したと言われる。しかし、図12～13などをみると、残念ながら、台所へ顔を出す男性は少数派に属するらしい。

そうは言っても、これから先、男女差の少ない社会が到来するであろうし、そうでなくとも子どもたちは、既成の社会のしきたりを破って、新しい生活を築いていく人たちである。

図12・家事分担

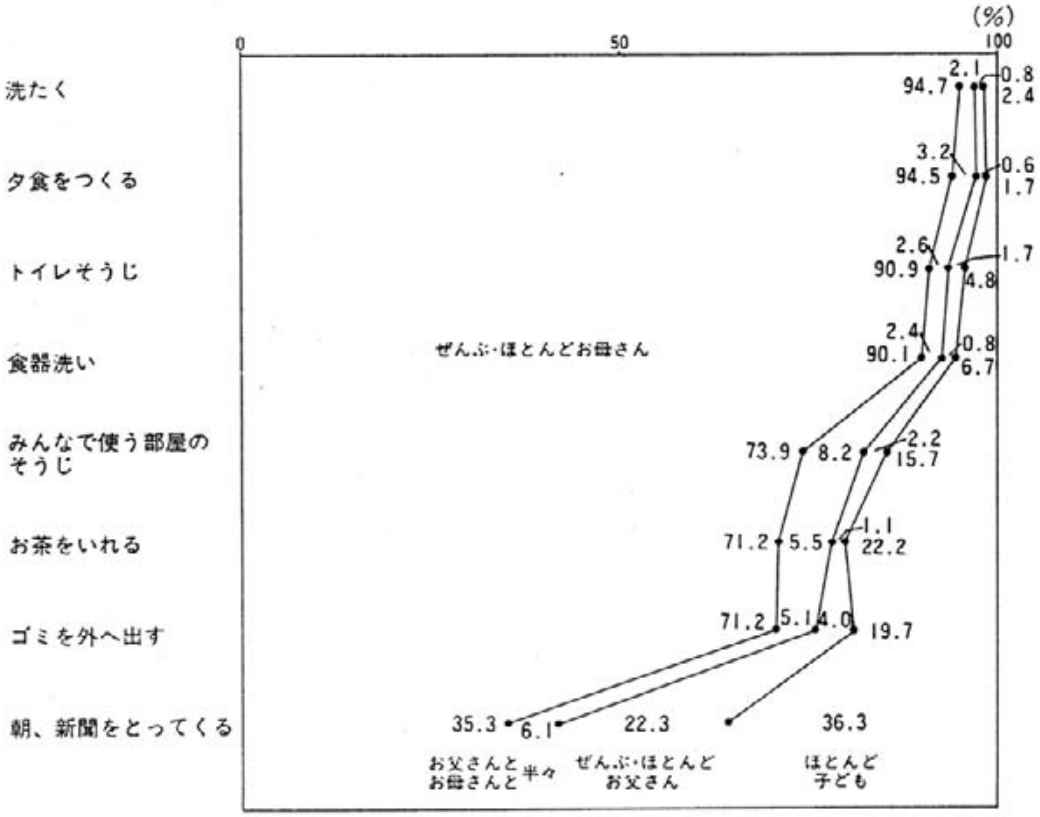
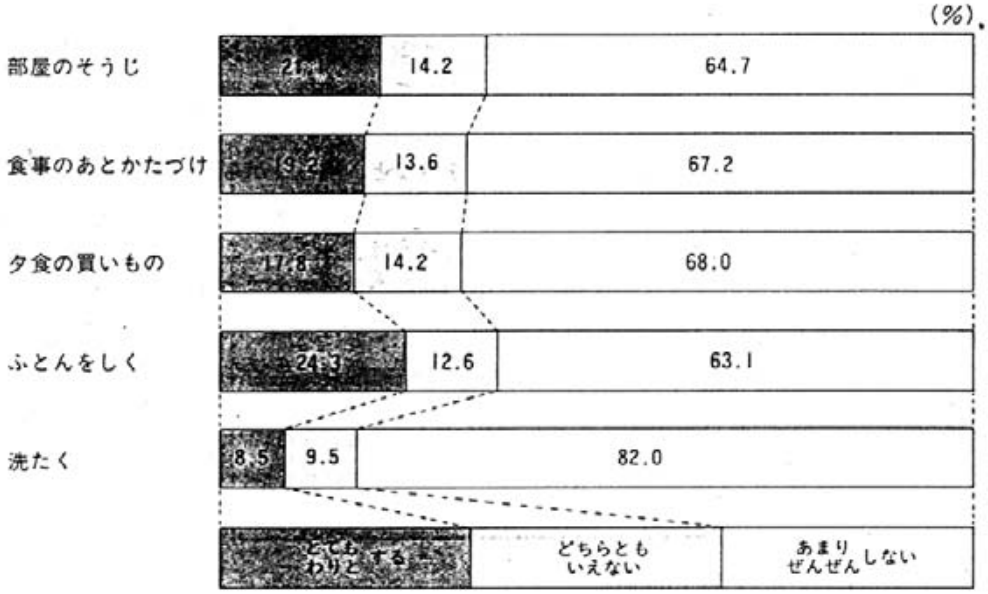


図13・お父さんのお手伝いの実態



子どもたちのつくる家庭

そこで、子どもたちの未来を探る意味で、「あなたがおとなになって、結婚して、お父さんやお母さんになったとします」の条件をつけて、自分たちの家庭生活を予想してもらうことにした。

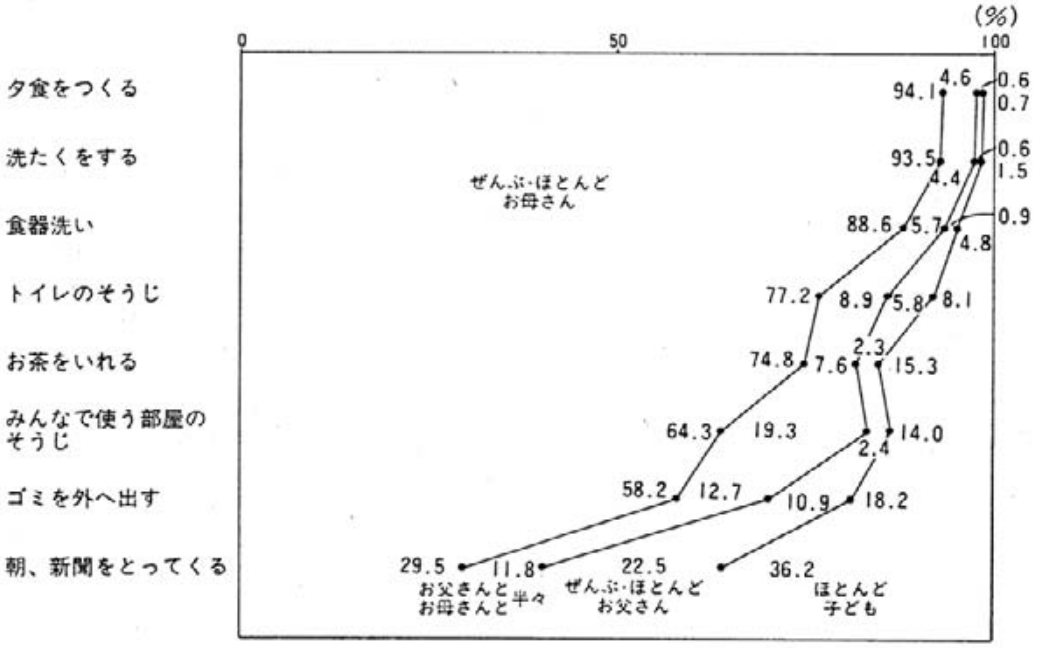
結果は、図14のとおりで、子どもたちは、「朝、新聞をとってくる」のは子どもの仕事になるかもしれないが、その他は、ほとんど母親の仕事だと思っている。

このところ、母親たちの家事離れがめだつといわれる。たしかに炊事やそうじよりも、社会参加へ意欲をもやす母親が少なくない。しかし、図14によれば、未来の家庭では、今以上に、母親、つまり女性が、主として家事を担当していくというのである。

夫は社会へ出て働き、妻は家庭の中を守る。いかにも古めかしい感じで、図14を目にした時、そう考えているのは主として男の子で、女の子たちは、そうした男の子たちの男性中心的な見方に反発しているのでは、と思った。しかし、図15に示したように、将来の家庭でも母親が家事を担当すると思っているのは、男の子より女の子のほうに多い。

つまり、性に対応した役割分業を、男の子はむろんだが、女の子のほうが、むしろ積極的に受けとめているようにみえる。もっとも、図16が示すように、子どもたちの描く未来の家庭生活は、現在、実際に子どもたちの家庭で営まれていることと、基本的にほとんど一致している。より厳密には「トイレのそうじ」

図14・将来の家事分担



や「ゴミを外へ出す」も、現在、母親たちがやっているが、それは、子どもがやるから、それほど母親はやらなくてもよくなるだろう。しかし、その他の面では、今の家庭で母親のしているように、将来の家庭でも、母親が家事を担当していくだろうという。

現在の生活が、未来についての見方を規定している。そうだとすれば、現在の家庭が母親を中心として動いている以上、そして、そうした実態を批判する機会も少ないから、子どもたちが、現在の延長線上に未来を考え始めるのは、ある意味では当然の動きなのかもしれない。

図15・将来の家事分担×性別

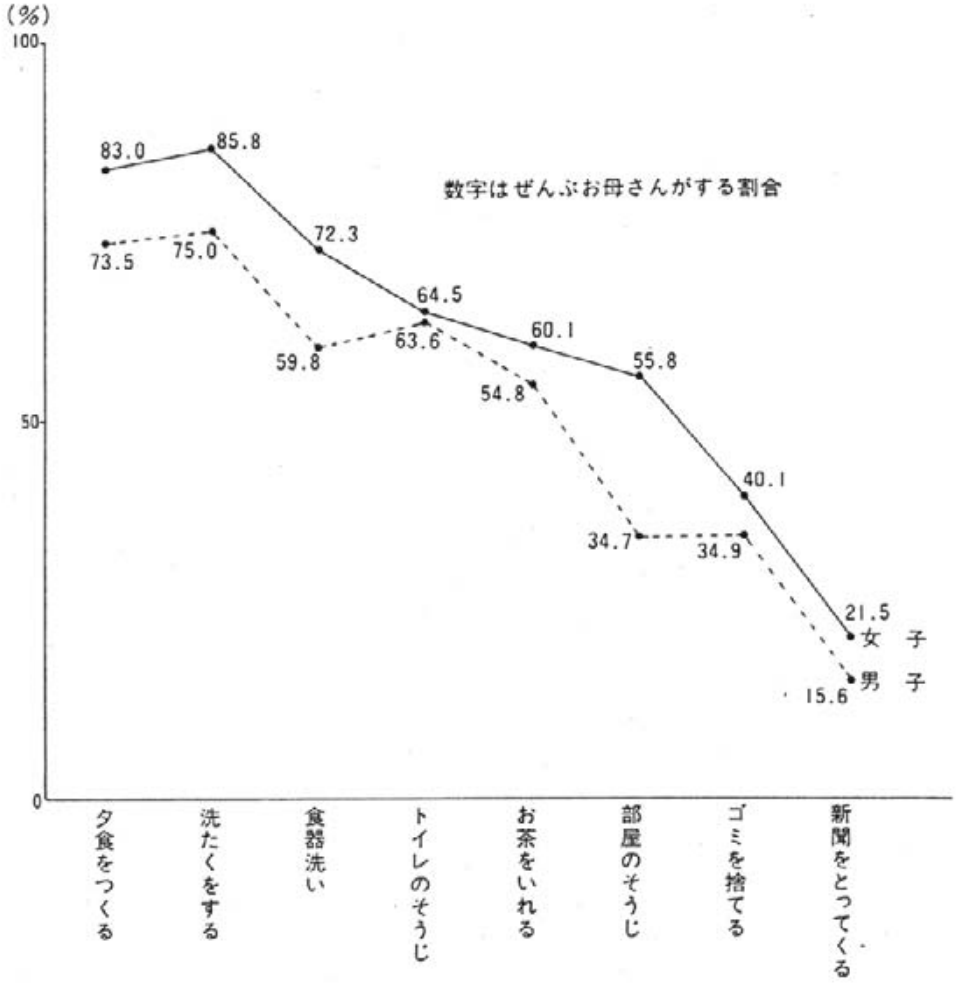
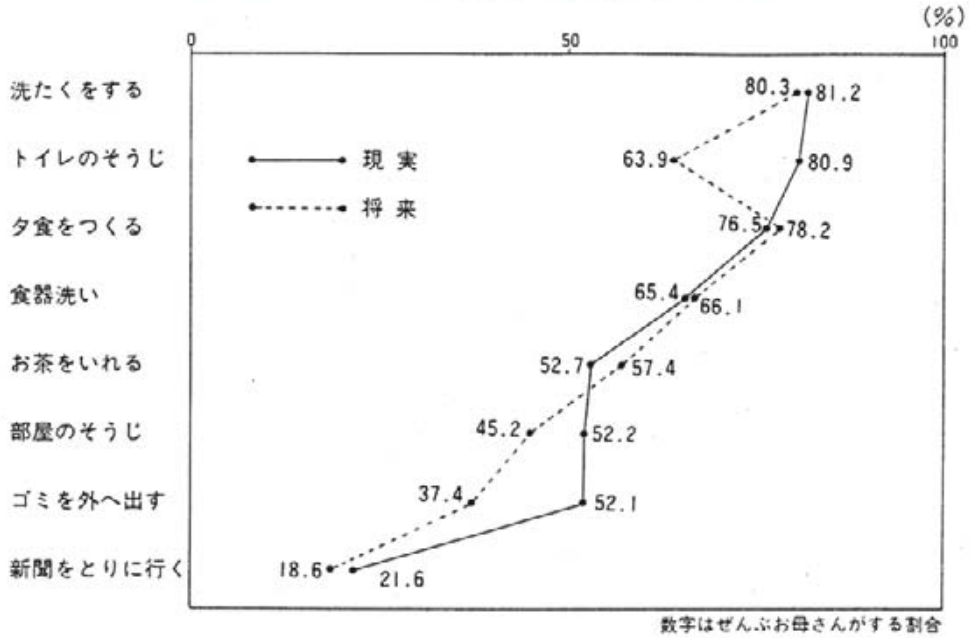


図16・将来の家事分担×お手伝いの実態



数字はぜんぶお母さんがする割合

女の子の手伝い観

なお、図6に、手伝いは本来、子どもがすべきものかどうかをたずねているが、念のためにこれを男女別に集計し直すと、図17となる。女の子たちは、家事をしなくともよいと思う割合は少ないが、男の子たちは、図中のプロフィールのとおり、しなくてもよいと思う割合が高い。そうした意味では、子どもたちの意識は、現在からほとんど脱皮していないようにみえる。

もっとも子どもたちは、もし将来、親になり、子どもに手伝いさせるとしたらの問いに、図18のような年齢からが望ましいと答えている。この中から、最頻値に注目すると、以下のとおりとなる。

①小学1～2年から
- ①食器を流しへ
- ②茶わん並べ
- ③テーブルをふく
- ④自分の部屋のそうじ

②小学3～4年から
- ①ふろの水入れ
- ②ふとんしき
- ③お茶をいれる
- ④部屋のそうじ
- ⑤食器をふく
- ⑥夕食の買いもの

③小学5～6年から
- ①食器洗い
- ②かんたんな料理
- ③洗たくものを干す
- ④アイロンかけ
- ⑤下着の洗たく

子どもたちは、どうしたことか、手伝いをさせるのは低学年からが望ましいと答えている。くり返しになるが、子どもたちはわかっている。しかし、わかっているけれども、ほとんど、実際に家事を行っていない。頭でっかちといわれる現代の子どもたちの姿が、この手伝いについても、あらわになったようにみえる。

図17・家事をしなくてもよいと思う割合

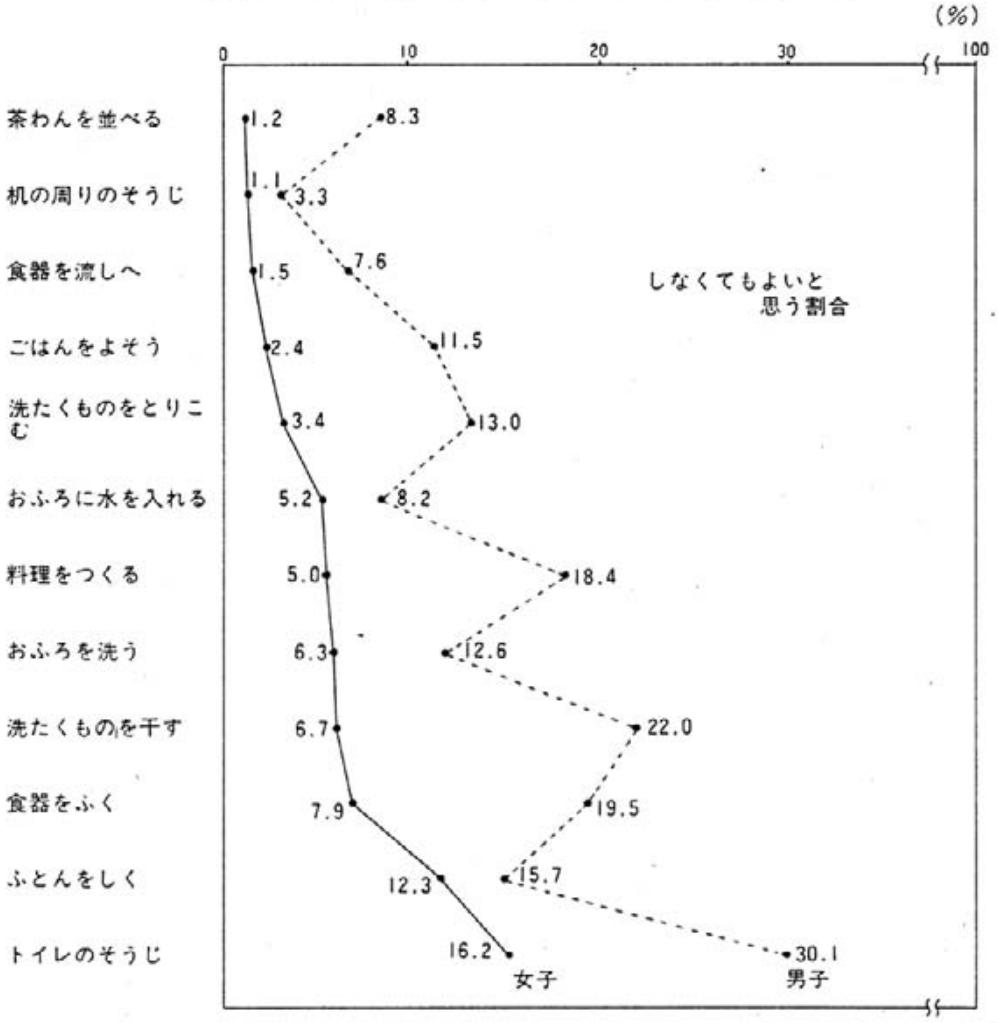


図18・お手伝いをはじめる時期

(%)

	1～2年	3～4年	5～6年	中学生	高校生	しなくていい
食器を流しへ運ぶ	53.2	34.0	9.8	1.2	0.4	1.4
	87.2					
茶わんやはしの用意	50.4	39.4	6.9	1.3	0.4	1.6
	89.8					
テーブルの上をふく	48.2	34.4	12.1	2.6	0.6	2.1
	82.6					
自分の部屋のそうじ	42.4	36.4	15.4	3.4	1.2	1.2
	78.8					
おふろの水入れ	32.5	40.3	20.7	3.0	1.1	2.4
	72.8					
自分のふとんしき	30.9	42.9	19.3	3.6	0.9	2.4
	73.8					
お茶をいれる	24.0	42.7	23.6	4.9	1.5	3.3
	66.7					
みんなで使う部屋のそうじ	17.6	34.0	30.4	11.9	3.5	2.6
		64.4				
食器をふく	15.8	43.5	31.0	5.2	1.1	3.4
		74.5				
夕食の買いもの	14.3	33.0	30.4	13.2	5.3	3.8
		63.4				
食器洗い	8.0	35.5	41.4	9.8	1.5	3.8
		76.9				
かんたんな料理	5.0	20.2	53.9	15.4	3.2	2.3
		74.1				
洗たくものを干す	5.0	22.2	40.6	21.4	5.1	5.7
		62.8～62.0				
アイロンかけ	4.8	20.7	45.0	19.5	4.2	5.8
		65.7～64.5				
自分の下着の洗たく	4.6	12.4	36.3	29.6	8.6	8.5
			65.9			